全五冊曲亭主人編

南總里見八犬傳第九輯

下帙上 十八之卷 就拾五丁餘

丁子屋平兵衛板

特別
14
600
12

南總里見八犬傳第九輯巻之十八

東都　曲亭主人編次

第百二十四回

師命を守て星額遺骨を獲て
残稽を受て白髪僧鬼と化す

文明十五年癸卯四月十六日、大法師の宿願成就して下総国結城郡城内なる
古戦場の草庵に、嘉吉の義兵の里見氏、興して立る春王・安王両人の城主結城
晴朝・大塚四郎・三浦・井出五郎左衛門尉・信田・戦場の忠・浮島・戎吉の諸豪、悪逆の誅罰を
猶生ながらへ退の帯を解き結願供養を遂げて、則是五十年昔の前修あらまし。嘉吉二年
元年辛酉より、今年壬戌に至て四十二年。念仏修行其創より八十許日に及る本
日は即那諸将士の忌月七日なりしかば、介程なる犬塚信乃・犬山道節・犬川荘介・
犬飼毛野・犬村大角・犬飼現八・犬田小文吾の仏の七犬士の里見殿の代香使蜜

照文と丈士

崎十一郎照文副使饒雪代四郎共保と共俱る照文の伴當と八個の雲衲相從へて
丈士辰の初刻より、大慶へ参詣し祈願す那須甲の院の住持長老八九個の
徒弟と相俱に、庵中に参る。庵中に有り。圓坐して庵員数の樹下より各分ちて布施を坐して讀誦の最
中なり。有り。程なく照文の伴紀兒仁、精米数十苞と、永樂錢七八十貫文を俱に車に
車子に積み、車を推させ、照文に見せ、伴當仁に受取り、紀兒を加へ、施行人別に米一斗と錢百文と相宛て、伴當仁に
進備する白麻の草帽七八張を、大庵の檐下より直に
頭巾に仕立て、樹木に吊し、遠国の張一旦、且両道の
長くなる中央より布一反を志て、進備遣る。その整仁の八個の騎兵は、
甲は各々腰帽甲を着し、棹棒を管し、分仁、非常を警めり。

品々礼服

勿論付

照文は長袴、丈士は肩衣半袴、共に倶に綿の夜衣、晴れ小脇刀を帯びる。
熱は焼雪代四郎も麻社衣を被れども施行の折の頭人なれば、錢と米と
料る。紀二六雪領は直塚、相俱る伴當郷左衛門は、
備は暇なり。傍而已牌左側に早朝向の讀経果て、大法師は
衆僧と倶に徐に草菴を立て、石塔婆を距ること六七尺なる儲の処
来る若干の白袴の夜衣に香深の法衣黒編子の袈裟掛て、
子に、りけるに、谷素朴なる仏像に、体竹心仙骨見れば最も高く、
りける相從へ市仁十口塾一樣に長老沙弥の差別なく、皆淄衣破衣白沙彼の
袈裟なり。上古に倶に相立て更に供養結縁の讀経あり。梵唄和讃の調
音に藤音齊一心年に澄し、木魚鳴響の呂律に合て天樂に同じるの洋
瑞雲宝器云に足ぐれども其式を失はず。衆徒実に感しけれども深

信猶餘りあり。供養の誦經復一時許既みて讀果まるべく大法
無上宝座を立て過去七佛を名號拜し奉り遂に誠諦の廣
文を聲奏し諸誦終る。その文まいてく。[illegible]
[illegible]四恩[illegible]報ずべし。狼獺の不仁なるもの。時に天を
[illegible]鵰の惡人良なるも獺を[illegible]の孝なるを[illegible]倫人かく
思ひて思ふ。[illegible]の心なく[illegible]獸[illegible]
擾乱君臣相克し五常地を拂て人心猛獸と異なる事[illegible]
[illegible]雙忠あり是[illegible]左祖義を伐る所雄[illegible]貴の諸將恩顧の[illegible]士
[illegible]君[illegible]の孝[illegible]妻子を[illegible]
[illegible]防禦矢[illegible]富三[illegible]六韜[illegible]
[illegible]。[illegible]の勢ひ[illegible]を[illegible]能ども雖然古語を不云[illegible]人[illegible]獸の

一人[illegible]

時[illegible]
[illegible]折れ[illegible]郎[illegible]泊て君辰[illegible]臣死せり[illegible]石共の[illegible]義実
[illegible]。[illegible]時[illegible]父と俱に其城[illegible]城陷るの日[illegible]
[illegible]東南の海隅[illegible]免れ[illegible]餘の輩[illegible]
[illegible]命を東南の海隅[illegible]免れ[illegible]餘の輩[illegible]
[illegible]。[illegible]安房の四郡と有ちし
誅戮し且不義の両郡司[illegible]安房を[illegible]
[illegible]東民を撫[illegible]仁を以て士を招く[illegible]賢を擇て[illegible]愚自義成[illegible]
[illegible]武士二十餘城遂に隣國二郡を分て[illegible]
[illegible]武[illegible]あり是を以下風に立つ武士二十餘城遂に隣國二郡を分て[illegible]
[illegible]方[illegible]滝屏[illegible]是併先考威靈の守る所祖先の餘德に依る者[illegible]
[illegible]実幸[illegible]男士の羽翼[illegible]を[illegible]為[illegible]創[illegible]遂に[illegible]
[illegible]霊魂[illegible]廟[illegible]を[illegible]平郡の大山[illegible]走[illegible]春秋の祭[illegible]
[illegible]恩の追薦[illegible]敢[illegible]鳥獸[illegible]雖今也戰世割据の列國[illegible]
[illegible]廟[illegible]横[illegible]車馬[illegible]是[illegible]取自其地[illegible]

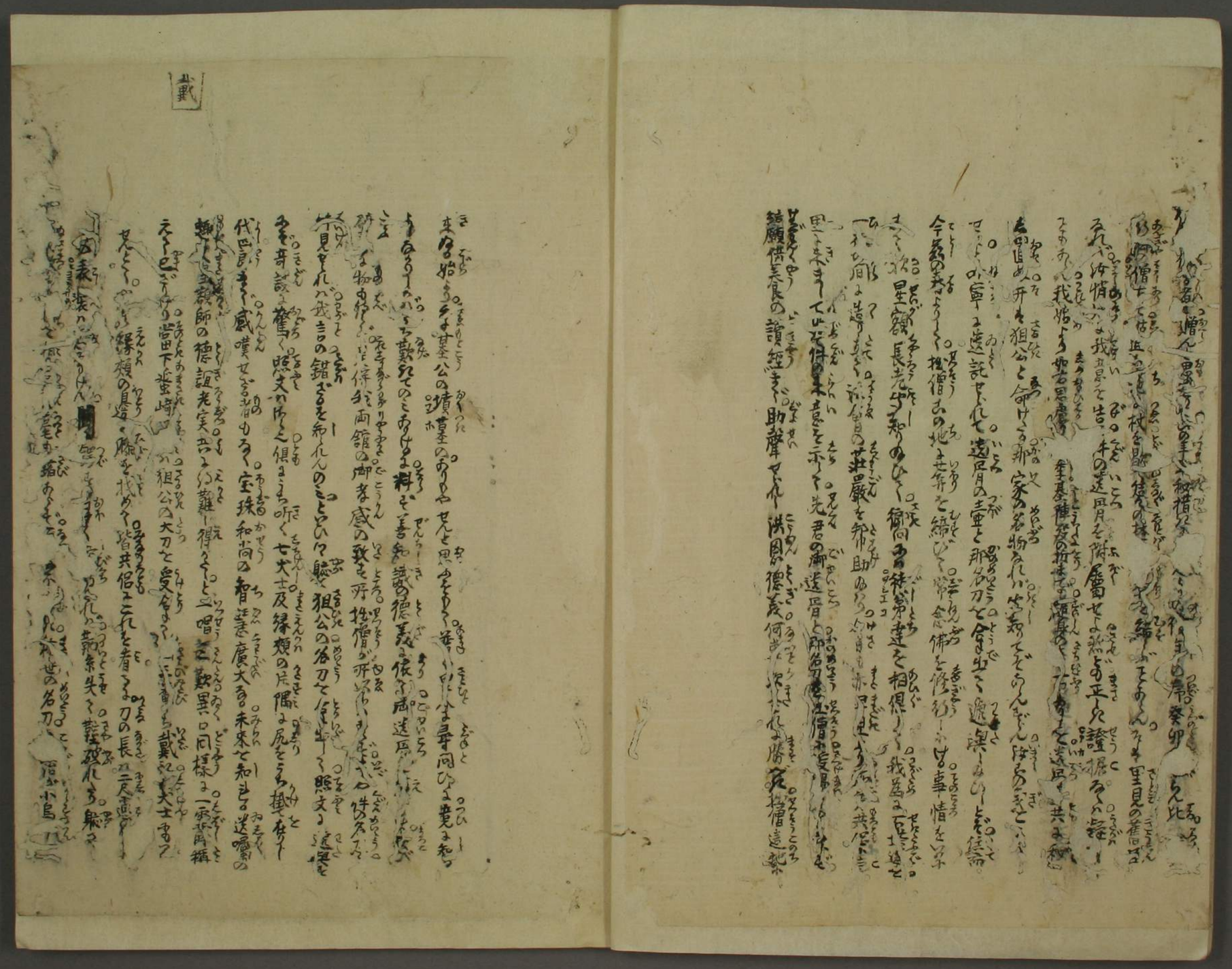
思ひ答へ徳を謝し奉る。○蓋し能く言ふ蒼臣二世の忠良金玉
の道、大恩を報ぜんと思ひ砕く。○寧恩を報ぜんと思ひ砕く。○猛精進
五戒を具へ一旦塵世を捨て錫を飛ばし嶮岨を踰越し杖藜
脚二十餘日近国義家の代々草庵を慕ひ古の戦場を巡り
昧の中より下て三月不退の大念仏を勤行し遠き皇恩の
将亦宮殿の舊跡を尋ね蕨ん乃至義家の厚相懽々寝れも因
泥犯紐三部千巻蘭盆経五部陀羅尼三巻を揭写し奉り使て
蜜崎照文の癡闇を供献焼香の礼を約し吽仏第の功徳
廣大無量迷津慈航の負を抜き所
北八有頂天に届べく下は金輪際に徹通し弥陀の願力の
降臨し五五の諸菩薩天部善神を比べ難き異香馥郁と

金蓮華を降し天外の音樂節奏鳳笙龍笛を聞き慶雲
西山より起り霞繚繞の間に
丈坑を長脱離し亟に量三寸の寶座に向
ぶべく常教光の乘邪を遊んで乃至一提普く八正道を赴
今の事日を本願大檀那前治部大輔里見義實朝臣安房守兼上總介
見義成朝臣の代り奉りて海場修行の沙門大行香使臣蜜蜜
恐べく敬白と誦し奉る
身を起し蜜の見遠し礼む程に代四郎紀六郎安房の両の寄る
経巻と香炉を両しよ捧げ相従て照文の身長遠く指くと照文又合掌
合掌。塔前に見る程に代四郎紀二六郎の樹下へ退け紀八又照文
塔婆に朗ひ端坐し日。細工の精妙

石塔あり義実主の先考[illegible]の神主[illegible]の傍に水二三斛を[illegible]可き主の
[illegible]園寵より容[illegible]りあり[illegible]何[illegible]の恵[illegible]の[illegible]の[illegible]の

孫紹代宋徳主[illegible]阿弥陀佛十念記[illegible]亦結願
偈に偈て可　圓輪如車山成月流　圓出名利等[illegible]遍　讃嘆
計我分　且任　作[illegible]牛　世事看來從理順　人謀
怎仰所天機　要知思如酬恩訣　念佛[illegible]代就枕　[illegible]遍
[illegible]来[illegible]在三世諸佛　苦の菩薩と唱ふ　記れば帯助の長老の亦偈句を誦ふ
願以此功德　普嚴佛淨土　上報四重恩　下濟三途苦
若有目聞者　悉發菩提心　盡此一報身　同生極樂國
十方三世一切佛　諸佛菩薩摩訶薩　阿耨多羅三藐三菩提
と唱ふ　記れば後僧都　低頭して供羅に於是　[illegible]再度主人大
師に拝すと会ふて　身を起して照文の坐邊よりまつ一面落ち　可[illegible]巻[illegible]
香奠の歌ひ　[illegible]　七尺士有り　誼あり　那壺ケ　[illegible]帯助の長老師第

と俱に照文に誘引せ　草庵へ　長ケ　這菴に　[illegible]候ければ十僧と一
[illegible]庵を容て久年の故と　七尺士に緑頬小帯　[illegible]帯助の
[illegible]對面して　[illegible]を見　獨犬江親兵衛　這小集に[illegible]　[illegible]
大仏頂　[illegible]あり　程と照文の八文字師　今日百塔源　具措し壺の[illegible]
、大笑　然へとよ　件の一義は同じとも　疾生とやと思ひ　[illegible]の眼を[illegible]
達　[illegible]　仏壇を[illegible]　那壺は今朝這長老の携り来く贈りの[illegible]　先君季墓
[illegible]月之長老は這近長[illegible]　[illegible]化院の住持ふく法名は星[illegible]先住空球の[illegible]
法燈を續[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
方丈の[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]



大池

鏡形　一ハ前ニ

「不料」を狽　狙公之刀源ヶ子

鑄着てありけれいる・疑ふべくもあらず

照文刀を鞘より抜めく、大師師之逆くくいふやう這名刀の

口碑ハ伝ハ

早職絵　有一時義ヶ輝

有一日　近習四五名を

射猟の為に遊山ありし

番山の松麓か底不知と

池あり　る松両之株池畔ニ繁茂

槽ヶ　者単眦併　右り季基朝臣ハ蕃山より麓ニ馬を

亘　今ハ侵蝕ス　頭ハ松の杪ニ有り尾ハ水中ニ隠れ

鍊の鏡を鞘ニ

食の猴猴ハ髪怕れて

飽ぎや　足狙公を呑んと

つ　怪む

遠ク　刎ク　聞ん

刀　自　鞘ニ返り

小撃　鉄ク

若門　地を

神宝　世ニ稀ニ

上揮の

蔵　今ハ

大蛇　程ニ

大蛇ハ

吐ク　近

弁ク　怪ハ大蛇を

大蛇ハ頭を伸ク　呑んとされハ脇刀も

蕃山の麓ニ馬を

怪ハ

怪ハ

怪ハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又[illegible]稲田きり造池より掘[illegible]

[illegible]近村の人相稱ス[illegible]武徳の池と[illegible]

七[illegible]

今寺て掘成ス見[illegible]

其刀の價[illegible]金百両を[illegible]

一期の[illegible]

[illegible]

[illegible]

老を送ん迄御慈善の餘慶[illegible]

歳と壽詞を轉り[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鈍や這乞乞場

今番這里

[illegible]

[illegible]

[illegible]

相似ること

老ばん　いつれ
失へるも多家年所あく六父ハ親も嘉吉ハ彼る戦殁の老僧ハ城の家ハ
ちゝ　れ　ち　ちゝ　ち　ち　ち

線の徳を倶にするを捨て那里へ退く人の運を儘せんのことを偽るを侵るを抵
林をくるの議宜を理りて安丹知る敵あれが留るより退くとも安危いまだ
我れ左まれ右まれ大大徳の先君の御遺骨を得るもが一二の男士相伴と
心許なく思れ給へ我れ兄弟七者の中一人和殿と倶に退く推参すれと諫れ
照文寺ふとを汲せ甲斐くるの議に従ひけり登時信乃の遠く信と備を天の行く大阪和
殿の潜農の富士より極く宜に主意あん快隊部を定めやといれて毛野の草の碩
話せ不思議花とも兄身れと異なる良策なけれども寄隊大勢なんあり奇兵をもて敵を
分ち一時に抜くまへ開を皆這里ある敵をなれば互角の戰ひ心許なく今思
い許んと● 逆蛮崎生ハ伊豆田共伯、大庵主ハ長ふ〜関宿へ立退べ〜
犬塚和殿と姥雪と逆蛮崎生を相伴ひ〜遊事敵を防ぐ〜一ゆ過ろ〜
又犬川犬田犬飼ハ殿兵三四者を従へ〜這里を距ること三四丁東の荒林を有る

ち〜其真道の樹に校る紙幡を掛けヨヲ数カ〜せ〜敵の先鋒よ気すきの焼亡疑
輪を〜〜農家ハ大村実伯ハ残る殿兵を相従へ這草蔭ハ敵を煙を猶
敵を分んちれどの敵カハ間諜見ても〜這方の虚実を窺ひ知ることあん難小
勢と知ることも一人吉田千太郎ハ計退けるを易くべ〜この餘の〜談
簡様〜と意表を送る解示せば信乃の道節ハ茶介大角も小文五郎皆共伯
好と稱〜先驍兵ハ中両個ハ課〜敵の動静をとく〜城下の方へ退
け赤程よ代四郎ハ件の軍議をもて所〜倒よ欲ぐ找出て難さう徒いる
礼へよく叱れ考る論ひ〜ども小可偶故主よ逢ふ今この危窮よ及ぶ折り拾〜
阿谷〜と安房へ退く〜んの憚りの〜本意ふ〜と死ぬるとも生るとも共伯ふと
思ひ〜願ふ〜の侠〜留置て道節ハ隙よ隷の〜いで〜と切る願ひと道節聴
ぬ〜聲ゆ〜〜〜赤ふ盃の口誦人憲〜ども既ハ〜〜〜和〜今の里〜〜

家臣我々と朋輩なるものを私情を演ずること義を違ふの最烏滸の沙君れば小文吾
荘介大勢の共侶を屠ること皆ニ三と諭を発し。代四郎才を表公ろ〳〵倶に准備をさせけ
る。当下信乃八尾を向ひて大穂ハ今卿遠骨を偏〳〵当所を退れ人倶〳〵ろ
ものとい流て、大ハ一部を及ばを季基主の骨霊と狽公の名刀を受け蔵めく脚科を
着けて草鞋穿帯を受佛を搭駝く出んとす。祈星額師第をえうう〳〵長老今番の
出発意い千島三ろも毒ーあるる。縁端ハ異日亦再會の祈もいん陶評の側枝折れ
ん。とく〳〵退りんへ〳〵とくを星額をうかゝ石塔僧をうち置一人寄隊近つゝ立迎へくつ
和解め〳〵事を相計ん。ろも亦当家の役をんなとゆゝ、大ハ黒頭を又道筋仏ろち
向い。ゆまくるあ〳〵ねもはとう人をみ傷りのひそ一個ろりもを敵を殺され日蔭の作善ハ
空とありて自他の功徳を表んとの気とこれりのと諭ず道節うたい。ひそれ亦を殺る
軍令る武兵を原是出発あり人今大敵と歌ん敬ゝく克を含んるの最敬〳〵

所行ゝ。近日犬江親兵衛の武功を伝ふる富山ハ籠山ハ百千百る兇
蛮を一個も殺さで降伏さる例もあれば左も右もせんとゝ荘介推
ろもなく何とろんハ人り名のりあるゝあり犬江ハ仁義の玉を産ゝ〳〵その性仁恕
ろんの徳を仁恕を及ぶまも又立優る所もあり。敵ハ
小文吾現八大角の共侶を矢局を今ゝ寛を是ハいれより出家ハ出家の作行あ武
士ノ武士の進退あり闘戦の方ハ也我々ゝ伴ゝ〳〵退りのれかと誉る間ま
照文代四郎及犬士々の祝殿を殿ゝ殿ゝ祝児を裏て躯て照文の伴当を遠塀
ゝ。身を固りくる阪鑑宿ハ現戦世の沿習を倣る祈武を産く准備を殿
落ちりけり。出れる両個の野兵を城下の百ちりかゝまて七犬士を報るゆう小可々も
乳指揮を従ひ〳〵那辺と徘徊ち敵の虚実を張ひりりを矢数
百もの兇大将と問ゝ行得場猶東ゝ〳〵馬るの船笠を戦を発前を発ひ

諸行無常
是生滅法
諸行無常
是
諸行無常
卓菴で自慢
なるの七犬士
犬を合り

[illegible]

[illegible]

[illegible]

旺立て出入不定の元驢に取り聚めて念佛供養を施行の報條を
術衢に貼り貼て愚と貪民乞児共に施えと威とを共に見て鳥獸の所行を恥べ
見物寺院の領主結城殿をも蔑如せるを結構その壯麗祥かなる寺
件の似而非頭陀ハ寺房の里見の舊臣なり故主の代りて遺薦の法莊を修
雜(ぞう)寺房より代番使(つかい)として里見の士卒二三十名来會(まうと)風聲(ふうせい)あり巷
言(ごん)蜚語の無根(ねなし)の誣(しい)あれば勿れ早く領主へ訴て理非を糾明せども
あらハ何なるこの後と懲えん武門の恥辱なり佛家の瑕瑾恩諸(もろもろ)と名遣(なづけ)
思ひ出でやと席を拍て四言示せば本山の侍者ありけり。裡釋坊堅前と喝做(かつさく)笠僧
衆議(ぎ)ひらぐ突然と拔(ぬき)ひらぐ現御(あらみ)欄影(らんえい)憤の夏の趣道理至極よ
ぬ。小然ちぐ兵書あり兵書を拙速を貴ぶとあり。その計巧(たくみ)なる冬(ふゆ)に
佳(よ)と命(めい)じ長註(ながとき)説くいの説を領主より訴のあり憤りて時日移りて

他(ほか)の代(だい)へ走(はし)り■べ。さてんみ常言(ことば)より聞(きく)語果ての体(ていさい)ふ昧世の胡虜(えびす)なる
ら(ん)、因て情地(じょう)思量(おもはく)する車(くるま)ひるるかる本山の檀越(だんをつ)なる堅名根生卑(ひくき)両兵頭(ひょうとう)
追鳥獵の連(つれ)よりく今朝未明より城を出て程遠(ほどとを)く野邊(のべ)遥(はるか)と出て
者(もの)へ家子(いえこ)道便人(ちかびと)なりく那毎(なごと)より快来會と諸(もろ)の時を待(まち)
まわるべ御簡量(ごかんりょう)かと詞(ことば)を詞(ことば)ぐ訪(たづね)ぐ結城の家臣と堅名根生
ド(ど)ぐ紅稜根生卑飛鳥太素頼の堅剛が拠(よる)より伴當列卒(ともつれ)と相俱(あいぐ)に麗(うるわしく)
鷲狗(わしいぬ)と手(て)ー畝獵(うねり)将(まさに)ハの儘(まま)ひく野邊(のべ)遥(はるか)より這里(ここ)ふ来(きた)よれば徳用(とくよう)ぶ斜(ななめ)
ら(ん)と髮堅剛(かみかたつよし)近(ちかく)く鮮(あざやか)説の席(せき)より拔(ぬき)ぐ紅稜と素頼ハ伴當列卒(ともつれ)
内(うち)る住(すむ)ぐ儘堅剛(かたつよし)る引(ひき)ぐ徳用(とくよう)る對面(たいめん)ぐ屋院の法師(ほうし)ハ席(せき)を譲(ゆずり)
上坐(じょうざ)に請(こう)寒暖(かんだん)を舒(のべ)ぐ意(こころ)ぐ時(とき)伴(ともつれ)特(とくに)鑑(かがみ)ハ法(のり)の口頭(くちあたま)の果(はて)を
祝(いわい)ぐ紅稜素頼(すらより)ぐ向(むかい)ぐ伴(ともつれ)の文(ふみ)の趣(おもむき)を両士(りょうし)ハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

云い　朴譚人程な長城
この義　茶を和さう一百許の殿兵と倡へ城内ちこれよりけれが素頼と経
稜ハ固生の席ニ招客し　住持徳用共伯ニ大家ひそく談を惰利れを聴き
ば現那壹僧ハ大の喜ハ後僚達ニ告げて曰ク又寄も及ぶべ
き　サテ這次ハ鳥獣所分倘見ても忍ぶべく就ても忍ぶべし　咱ハ
捕の准備ニ　殿兵を送る　領て来れり各隊配置慮ぶべ　と向ふ経稜
素頼ハ偽る答へ　然べとよ　咱ハ不用意ふ　殿兵ハ　這よ
ハ遠ク　客ハ徇示ク　猶可ニ土兵を駆催ク　けれが　と
程ク　咸まべ　見る本山内外ニ　法師武者ハ加ル　既ニ四隊の雄兵あ
訶里の法會ニ連る　見の士卒ハ三千餘名ニ餘ハ庵ニ賀ける　出
処不定い　秀驅　十人ハ過ぎ　敵方のヨ　八方ニ

捕稠　那ハ　島丈の男　捕漏　と　徳用推禁
開ハ　論　非除里見の士卒ハ　送る
抽　但　非頭陀　大と走る　後　遺恨　今思意
堅　生野主ハ土兵と相率　本街頭ニ推寄　堅制是ハ
子院屋国主の衆徒道人　平分　隊ハ相俱ニ宥先鋒ニ　又長城主ハ隊兵と
領て　川迫ニ　先ニ　他ハ　賊て走ん　折開ク去　向て捕稠ク　刺挑ク　藪
隅　但　武井の遠ク　岐路ハ正路ハ　闇宿ニ　木下風　行徳ニ到る　開ク　路　江
戸へ　怠ハ　又拉僧　合手の所化と道人ハ　後ハ　長城主と共伯ニ　皆地ハ先へ
出て那岐路ニ敵を　ん　武井諸川の遠方ハ　利根河ニ相通　闇宿ニ
河の一箇ハ松戸新宿ニ　別れて　戸田河と　做る　有　向ニ　津　不和家
進退不便　推　ハ　誰何　隊ハ　鼻蟲ハ　絆

[illegible]城備利は件の一説なり。通憲入道、[illegible]
訴法[illegible]鄙方より引導ハ[illegible]の圖を當て精妙の咱仆の隙を合ひて伏兵より
[illegible]の勇士の本意を悟り現二の隙を大事乃咱身ハ既に准備を野々[illegible]
[illegible]本よりれの持せ火鏡[illegible]敵小援の兵ハ[illegible]倘ほ餌ふ擊仆さん。その義も
[illegible]安るべしと噪ぶ蒼髯[illegible]折を皆驚心く思ひ却酒盃を行[illegible]
譚ふ折ふ這近郭の[illegible]壮客仆ハ堅石短稜根生野素頼ふ催促ふ從ふ。未聚る者二
百餘名よれ連枷捍棒長柄の鎌を携へ既ふ當寺ふ來ふ。[illegible]
家ふ[illegible]勢ひ凄く。[illegible]快打ふ。徳用堅削衆徒道人准備ハ身ハ鎧衫
[illegible]各臂鞆脛衣ふ身擐へ器械を背傷ふ引着て倶ふ部と叮く程ふ本山の先住
[illegible]未得と喚ふ僧を老僧ふ。齢も既ふ八十有餘年来医師[illegible]内の別院ふ[illegible]
今ふの一詠を人伝ふ[illegible]驚ふく一寧時も沿堤む向れの行量ふ技拙れ

出ふ[illegible]住侍徳用ふ向ひ涙と共ふ諫ふ他御ふ[illegible]法師ふ城仆ふ
古戦場ふ[illegible]嘉吉ふ陣歿の列将士卒の菩提の[illegible]合併[illegible]先我寺ふ示ふて
非ふ[illegible]帯助と詰れ[illegible]開ふ[illegible]化の將事を醋ふ[illegible]蠱院の衆徒を召聚會
武家の横仆[illegible]譚ふく出家人多相ふ[illegible]裏儀の誠を[illegible]欲天魔の障害[illegible]
旦法會の願主ふ大とやふハ安房の里見の舊臣ふ故主ふ代ふ供奉ふ仕れハ里見の家
臣も我ふ[illegible]家[illegible]ふ[illegible]嘉吉ふ[illegible]城ふ[illegible]御方の列將ふ[illegible]耶里見[illegible]
墓主ハ我先館氏朝朝臣と莫逆の信を[illegible]その忠義の義ふ[illegible]
朝朝臣城邑再興の初ふ[illegible]古ふ戦歿の列將義士の菩提の[illegible]石造の地蔵菩薩を
建立[illegible]主の菩提表と定[illegible]世ふて[illegible]人稱ふ[illegible]
我仆職ふ折ふて[illegible]寺の舊記ふ紛れ[illegible]件の法ハ[illegible]見殿の[illegible]
命ふ朝ふ[illegible]亜ふ御方の列將士卒の若提[illegible]自池平[illegible]

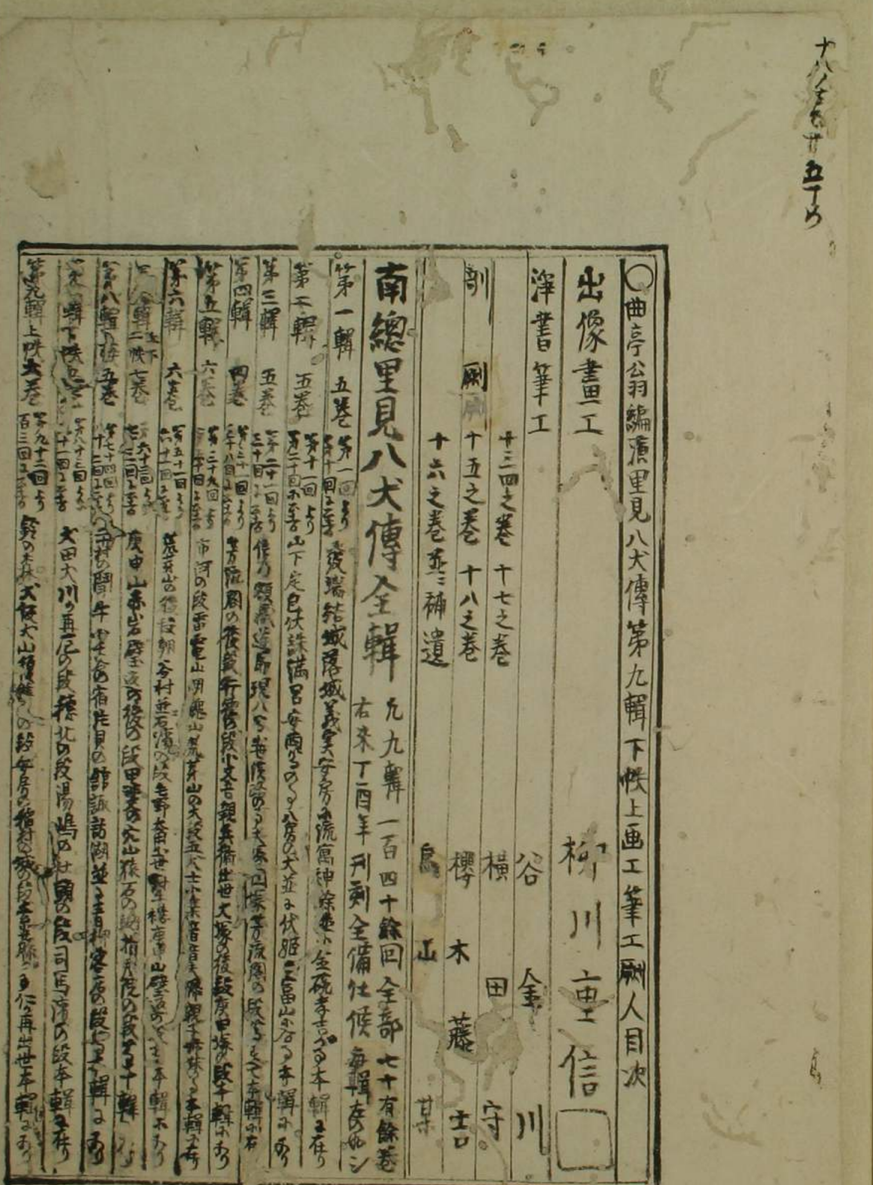
義を當世外へ外う許まるとも受懼せ何でも追捕せんやといろ又
們三個寄まるに向ひて各〻格另多く素から道理を面白ハる〻那義と云ふと思ひあり
館へ到り案りくそ如ん下に依りあるべしと私の說を直しく或ハ僧侶の
帮助を借りて縛捕の準備何事かや忠ますを義を導く傲慢の事免るべしとみな〻三思
あるべしと云ふ方を君理り切る老僧の某言口を聞けハ狂ふ様に驚く
いて怒る法殺素頼隨利も共侶よ權威を無き聲を高く小ざるの言和僧ハ
心や慈悲憐愍厚ハ佛意なり邦の法度ある武士ハ武士の務あり譬言ハ那奴ハ言を
設て我先君の菩提寺に帰奉るとべしと人口憚まぬ法會三昧酒見先君三廻忌
非礼の狡猾許さぬぞと烏許るまじと罵れば然之と黙顔く德用堅剛俱うと拒く三
檀越の言道理を稱へ君臣義烈の戰を憐れ遣立あり折其
義を安堂へ告しれもく他の領地へ達ハ今番他們が這地へ法延施行と同

鑑見許を賞し給ふ。

皆ひ。

時の過ぎ慎偏て。

ぶりを乱れる世ハ私欲も弥花の利剣を一頭を斬り〻天子仔軍國事祭主の興ふ延
芝拂いなる山門の大衆が京法師先例い寄〻あり迂遠なる似而非談義時後ハ後輩の
ん獻ぶよ足ぶ立ぶやと打廉鎧のあり立て拂ふ三士の勢ひ熱鳥馬の像く
猶ぶ生復後者堀留難ふ空子劍降一人惰羅隆ふ祥心る悪僧ふ夫輝と動信を外
面へ出を避と欲る者る長城駿兵甚客們及堅者と根生野の仔當列卒們迷ふ会
厚辺く一則る斉整ふく里列れと三士ハ信と相一百一〻事〻三ハ示ぶ大家都てふる
沒ふ中ふ近郊を住客毎ハ敬ぶ料〻ふ舞捕ハ古戰場を虐ふく僧供養ふ
行愛兵衛大廣主大坊及末寄の士卒を滿ふ摘捕ふ愛ふ摩ふ切ふ旦答ふ
旦ふ目ふる目ふ主ふ者ふ思ふ催促ふ儘ふ縄ふ懸ふ
アふ愛ふ既ふ者ふ疑ふ者ふ已ふ捕ふ鎗ふ
法師武者ふ二道人ふ郎ふ勇ふ向ふ進ふ百ふ門ふ駆て蛇素頼利ハ各



○曲亭公羽編纂里見八犬傳第九輯下帙上画工筆工剞人目次

出像畫工　谷金川　横田守　櫻木藏　土口甘水

浮書筆工

剞劂　十五之巻　十七之巻　十八之巻　十六之巻　五巻　神遺

南總里見八犬傳全輯

第一輯　五巻　第二輯　五巻　第三輯　五巻　第四輯　四巻　第五輯　六巻　第六輯　六巻　第七輯　六巻　第八輯　五巻　第九輯　上帙　五巻

九九輯　一百四十餘回全部　七十有餘巻

右来丁酉年刊刻全備仕候　乗輯　左ゆシ

柳川亜土信

第九輯中帙上七巻　第百四回より百十五回まで　富岳後篇　後篇富岳後篇の人不入の段　清路信の段　兵衛遠行の段　本輯まで
第九輯下帙上九巻　第百十六回より百二十五回まで　不忍池の段　西国行厚の段　未来記の段　蘭学者の段　蘭学者の段　成島の段　改正の趣意　洋学者の段　八百屋中二帙の
第九輯下帙中五巻　第百二十六回より百三十四回まで　是より下八作者の稿本なり　成島の段　蘭学者の段　蘭学者の段　蘭学者の段　蘭学者の段　蘭学者の段　蘭学者の段　蘭学者の段　蘭学者の段
第九輯下帙下五巻　第百三十五回より百四十五回まで　巻の数を回数と共に

右八犬伝全部七十餘冊二百四十餘回　明年刊刻書は仮名交ぜ文にて出版　紙数は一冊一帙分を二巻一冊とする割表本伴の八九輯全部
子の御誂を儒者なり　仮名一應皮紙摺りは　付大抵一輯一帙分を二巻一冊とする割表本伴の八九輯全部
十二二冊と可来　たんべ遠国へ御進物　或は御流行の折　或は浪花沿場　一ツ橋　水戸の道中　岩瀬　ぐ
至極の御愛利　なくば　亦並製表本　第一輯より六七輯まで　刺画の花星　校合失敗　標題等
恢宏の模様　稚拙の磨滅　及びは世般恵　耶り改める割表本　艶も弄板　紫一の折の如く　年も疎
墨多く折も摺廻　毎輯品花　ぐ　板も仕入　直ち同本房　堂も向寄の書　肆　まく　是　林文治　堂　日
とくなる世も物本　あるよりは来る大部の類　なく　春日秋夜の御歴史　まつ　校　是　林文治　堂　日

近世説美少年録第四集　第一輯　第三輯　三十回より　刷　刊　とん　版
第四集　三十一回より四十四　五　表　紙　ベ　ル
第四集　四十一回より五十回まで　刷　刊　本集五冊　近刻

開巻驚奇侠客傳第五集　第四集　近刻

莊蝶公羽再逢外紀　第一集　胡蝶物語前後二編今ハ絶版　因て曲亭公羽ふたゝび世に刊行　又その書を刊行まつる　五冊　近刻

著作堂一夕話　三本　五巻　本草吾が山中一夕話の書あり　とゝもよりて　霞墨　ものゝ公羽の随筆なれば　初ものなり　稗面　近刻

曲亭翁著作八犬伝一書目　第八輯より　下九編の下帙
まで本房刊布の藏板　その餘の源氏物語　一書目録の所
刊布の客歳乙未の冬十二月　第一輯より第七輯までの
舊板を彼処より購ひ　全部不殘本房の藏板
塚ひ仮板　之を写し　校のちゝひ失せ　神刻付製本
忘れ　仮板　美本　仮作　来製新書目録の右
偏さり　世　本伝必明年　結局大団円　至
鏤の工功　果　むこ　又美少年録第四集この
録の目録　の新編　毎年刊外　仮
四方遠近僊境　君　ものとそ
ものとかねなり　文淇堂再白

天保八年丁酉年　春正月　吉日　今辰發行

書行　大阪　南橋筋傳馬町　河内屋長兵衛
同　河内屋茂兵衛
江戸　小傳馬町三町目　丁子屋平兵衛　板

○家傳神女湯　婦人のみの病　諸病の妙薬　一包代　百銅
○精製奇應丸　大包　公金五両　小包代　五匁　中包　金五匁　三匁
○熊胆黒丸子　一包代五分
○婦人必用の地薬　一包代五分
製表藥本家　四谷塩町　弘新　元鹿田町中坂下南側　四方みな長の白　瀧澤氏　沢氏

此案ハ天保七年丙申の夏六月十八日第百廿五回
十八頁迄稿之十八頁以下又八頁半奥目録
同年秋九月二十七日稿了

著作堂主人

筆

福

大

士

刷

硯

主人

市